

谷山
樋口芳麻呂
編

中古私家集

二

古典文庫

古典文庫第一八八冊

昭和三十八年三月二十日 印刷發行

©

(非売品)

編者

谷山 樋口 芳麻呂 茂

發行者 吉田 幸一

集家私古中
(二)

東京都板橋区熊野町三四

印刷所 帝都印刷製本株式会社

發行所

東京都(巢鴨分室局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

樋谷 山口 芳麻呂 茂
編

中古私家集
二

古典文庫

凡 例

一、本書は、中古の私家集のうち未刊のもの、または孔版その他で既刊されていても今は容易に入手しがたいものなどを、翻刻し刊行しようとする「未刊中古私家集」の第二冊として、異本忠盛集、重家集の二集を収めたものである。

一、原本に忠実に翻刻することを旨とし、漢字仮名の別、仮名づかい、送り仮名、合点、傍注も底本のままとしたが、異体古体の文字等は普通の表記に改め、通読の便宜のため濁点を付し、また詞書などには句読点を施した。

一、各集毎に、それぞれの歌頭に配列順序を示す番号を付した。それらの番号中、括弧を付してあるのは、集中の他人の歌である。

一、勅撰集および主なる私撰集に選入されている歌や他の私家集、歌合等に見える歌については、その右肩にハ　　Vを付して集名等を記入したが、なお見落しも多かろうと思うので、大方の御教示を仰ぎたい。また、あきらかに本文の誤脱とおもわれる箇所や不審の箇所についても、その傍にハ　　Vを付して、

編者の簡単な私注を加えた。ただし、 $\wedge$ $\vee$ を付していない傍注などは、すべて原本に見られるものである。

一、涉獵の労が足りないためではあるが、異本忠盛集は未だ他に類本を見ないので、ひとまず編者（谷山茂）蔵本を底本とした。他日、底本または校合本とすべき伝本の出現することを期待する。重家集は尊経閣文庫蔵本（上巻）、慶応義塾図書館蔵本（下巻）を底本とし、上野図書館（国会図書館）蔵本（上下巻）をもつて校合し、その異同を次のごとく注記した。

心・を・か・れ・ぬ・（か・れ・ぬ・上）

まかせつる（ける上）

黒点を付した部分が底本の本文であり、括弧内が校合本の本文およびその略称である。なお重家集底本の歌のなかには、歌頭に朱書の小円の記されるものがあるが、配列番号の上部に。の符号を付してこれを示した。また二行書の和歌の右肩あるいは左肩に、墨書の合点の記されるものがあるが、歌の右肩にの符号を付してこれを示し、特に左肩に記されるものだけは

（左肩）

として、合点の左右を区別した。

一、解題は各集の書誌的解説や資料的考察を中心とし、また忠盛、重家の作歌略年表を付した。

一、本書の刊行にあたり、貴重な御蔵本の閲覧と翻刻とをお許しいただいた前田家尊経閣文庫、慶応義塾図書館、上野図書館（国会図書館）また種々御教示御援助を賜った久松潜一、池田弥三郎、香川景松、阿部隆一、久曾神昇、橋本不美男、朝倉治彦、福田秀一、石原清志の諸氏に厚く御礼申上げたい。

昭和三十八年一月

谷 山 茂

樋口芳麻呂

目次

解題

平忠盛集（異本）……………九

大宰大貳重家集……………二五

平忠盛集（異本）……………五九

大宰大貳重家集……………一〇七

解題

平忠盛集（異本）

流布本「平忠盛朝臣集」（「故刑部卿集」）は、統群書類従・統国歌大観等にも収められているが、その歌数はわずかに二十九首、巻末に「見勅撰歌」として添加されている九首を合算しても三十八首にすぎない。いうまでもなく、刑部卿忠盛は、平家興隆の基盤を築きあげた武将であり政略家であつた。のみならず、彼は詠歌においても、金葉集以下に十六首入選している勅撰歌人でもあつた。したがつて、彼の家集としても、今すこし多くの歌を含んだものがあつてもよさそうにおもわれ、またそういう新資料を発見することによつて、平家を新興せしめた忠盛という人物を、引いては平家文化の一端を、今すこし詳しく知りたいものだという期待はあつた。

ところで、ここに翻刻する編者（谷山茂）蔵の「忠盛集」は、縦二十七・三厘、

横十八・五糎、濃紺紙表紙、袋綴。表紙題簽に「忠盛集」とあるが、内題はない。墨付は一面十行の二十八枚。凡そ寛文頃の書写かとおもわれる。実は、往年この本と同筆同装の私家集数点を一括して入手したのであるが、それらのうち林下集の奥に寛文元年書写の由が見えるので、この忠盛集もだいたいその頃の写本かとおもわれるのである。所収歌数は約百九十首、うち重出歌十四首、連歌一首、他人歌五首を含んでいる。また、流布本に見える歌も約二十余首を含んでいるが、忠盛の家集としては、たしかに異本または広本に属する伝本といつてよからう。よつてこれをかりに「異本忠盛集」と呼ぶことにする。

さて、編者蔵の異本忠盛集は若干の誤脱らしい箇所などもあつて、必ずしも善本とはいえないかもしれないが、いまだ他に善本の所在を知らないので、一まずこの編者蔵本によつて、その内容を略述すると、最初に崇徳院の召された久安六年の百首歌が収められている。俊成の正治奏状によれば、忠盛もはじめは久安百首の作者中に加えられていたはずだが、後述するように、その部類以前に卒去したためか、現行の久安六年百首（群書類従所収）中には、彼の百首は見られな

い。(ついでにいえば、類従本久安百首は部類された形になつていない。部類した本が紛失してから、各作者の百首を個別的に集めたものであるらしい)。しかし、忠盛もたしかに久安百首を詠んだであろうことは、流布本忠盛集にも「新院百首歌めしけるにまいらせんとて」とか、「新院百首歌めしけるに」などという詞書の付せられた歌が見えることによつても、ほぼあきらかであつた。それにしても、この百首はあるいは完詠せられず、したがつて進上もせられずに終つたのではないかという疑問をさしはさむ余地が残されているかもしれない。けれども、康治頃に詠進の下命があつてから、久安六年までは足かけ八年もあるので、忠盛も久安六年にはやはり他の人々と同様に、一まずこの百首を詠進していたであらう。ところで、久安百首の奥書に、「仁平三年暮秋之頃、依別御氣色部類進畢。左京権大夫顕広」とあるが、忠盛は仁平三年正月十五日に卒去しているので、すくなくとも同年暮秋の部類の際には、彼の百首は除かれたのではないかとおもわれる。もつとも、類従本久安百首の巻末には、さらに「此百首、先人俊成乍置数輩之上臈、奉仰部類。一度奏覽之後、隆季朝臣進上歌可切入之由被仰、返給之

間、有保元事不能奏覧。已上人々所進之本、自然留家々」などという定家の奥書も添えられている。すなわち、顕広（俊成）が部類した久安百首集には、初度本と再度本（ただし、これは奏覧せず）とがあつたようである。忠盛の百首はその初度本にはあるいはまだ残されていたかもしれないが、現存する再度本（隆季の歌を切り入れたもの）では、確かに除かれている。（類従本久安百首でも、未部類でありながら、忠盛の歌が見えず、隆季の歌が加えられている）。そういうわけで、この忠盛の百首は、世間では久安百首と認められなかつたのではないかと考えられる。忠盛のこの百首中から、千載集以下の勅撰集に五首、月詣集に二首、万代集に一首、夫木抄に四首ほど採られているが、それらのいずれにも、久安百首の歌であることを意味する詞書が付らせていない。とくに、本集四番の歌は、流布本忠盛集にも見え、「新院百首歌めしけるに」云々の詞書が明瞭につけられているのに、月詣集では、これも「題しらず」として採られているのである。

前掲の定家の奥書によれば、この忠盛の百首のみならず、久安百首の各作者の歌は、再度の奏覧ができなくて、「自然留家々」ということになつたらしいが、

その若干は「親隆集」(三手文庫蔵その他)「季通集」(彰考館蔵その他)などのようにこのときの百首がほとんどそのまま各人の家集と呼ばれて伝えられたりしている。もちろん、親隆や季通らの久安百首は、それらの家集の出現を待つまでもなく、流布本久安百首によつて見る事ができるが、忠盛の久安百首は、この異本忠盛集でなければ、その全貌をうかがうことができない。本集に付した番号でいえば、一番から九九番までの歌がそれである。ただし、百首あるべきところ、一首不足(詳しくいえば、冬歌で一首過剰、雑歌で二首不足)している。

この百首の次の歌どもは、一〇〇番から一四二番あたりまで、だいたい春夏秋冬恋雑の順で並べられているようである。しかし、その部類は多分にルーズである。さらに一四三番あたりから巻末までは、ほとんど部立もなく、いろいろな歌が雑然と収められている。そして、本集の詞書中には、たとえば「熊野へまいらせ給。とて」・「……よませ給。ける」などと、尊他敬語などを用いている部分も見られるので、おそらくこの異本忠盛集は自撰家集ではあるまい。また、約十四首の重出歌などもあつたりするので、忠盛の遺族あたりが忠盛の歌をまとめにかか

つたときの草稿本であつたかもしれない。さらに想像をたくましくすれば、「未刊中古私家集一」所収の「経盛集」に、「左京大夫 俊成卿 打聞せんとて故刑部卿のよまれたる哥ども尋侍しかば」云々という詞書が見えるが、その俊成の求めに応じて、経盛が父忠盛の遺詠を蒐集整理するときの草稿本であつたかもしれない。

ともかくも、この異本忠盛集も忠盛の全歌集というには、なお程遠いであろうが、その所収歌は流布本のそれに数倍しているだけに、平安末期の武門歌人としての、さらに広くは古代から中世への過渡的社会の一翼をになつた男としての忠盛のプロフィールや消息を、今すこし詳しく知る資料となる。周知のごとく、忠盛は白河・鳥羽・崇徳の側近寵愛の武士であつた。したがつて、本集でも、まずその三院の歌会における歌がみえるのはもちろんのことであるが、四条宮齋院・顕隆卿家・為忠朝臣家・顕仲卿家・顕輔卿家・遍照寺等の歌会や歌合に出詠した歌もみえる。その他、為通卿・成通卿・源為義朝臣・前齋院尾張・小大進等との贈答歌も見られる。（本集以外の文献によれば、忠盛はさらに、惟方・公重・登蓮・俊恵らとも歌の上での交渉をもつており、とくに林葉集や経盛集によれば、

忠盛は自邸での歌会も催している。次代の平家全盛期をもたらず政治的経済的基盤は、すでに忠盛によつてほぼ形成されているといつても過言ではないが、この一族の文化圏の素地も、このようにして早くも忠盛の代に開拓されているかとおもわれる。それらのことについては「平家物語と異本忠盛集」（谷山茂稿）においても触れておいたが、さらに本集自体に即して詳しく検討されたい。

次に、本集の個々の歌どもの製作年次は、残念ながら未詳のものが多いため、他の文献をも参照しながら、忠盛の略年譜を作つてみると、次の如くである。

年号 西紀 年齢 諸事項（◎印は忠盛事項、△印は参考事項、太字は異本忠盛集の

歌番号）

永長元 一〇九六 1 ◎誕生。

天仁元 一一〇八 13 ◎八・二九、任左衛門少尉（中右記）。

永久元 一一一三 18 ◎三・一四、叙従五位下（殿暦・長秋記）。

◎四・五、興福寺の暴徒を討つ（中右記）。

◎四・三〇、父正盛と共に南京の大衆を宇治に防ぐ（中右記）。